

感染症発生動向調査委員会報告 9月

今月のトピックス

インフルエンザの報告が引き続き増加しています。都筑区では、注意報レベルを超えた数値となっています。今後の発生動向に注意が必要です。

新型インフルエンザウイルスによるインフルエンザ脳症の報告がありました。

8月10日から9月7日までの病原体定点からのインフルエンザウイルス分離・検出状況では、検出された29件すべてAH1pdmでした。

【患者定点からの情報】

平成21年 週 - 月日対照表

市内の患者定点は、小児科定点:88か所、内科定点:57か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

第33週	8月10～16日
第34週	8月17～23日
第35週	8月24～30日
第36週	8月31～9月6日
第37週	9月7～13日

平成21年8月10日から平成21年9月13日まで(平成21年第33週から第37週まで。ただし、性感染症については平成21年8月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数把握の対象

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

9月の届出数は、18日現在で2件です。感染経路は不明でした。当市での発生件数は少なかったのですが、厚生労働省から飲食店チェーンでの肉の取り扱いについて、緊急情報が出ていますのでご覧ください。

「腸管出血性大腸菌 O157 食中毒の発生について」

<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/iyaku/syoku-anzen/kinkyu/0914-1.html>

<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/iyaku/syoku-anzen/kinkyu/0908-1.html>

啓発用チラシ「O157 に注意しましょう」 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf> も合わせてご利用ください。

< レジオネラ症 >

9月は18日現在で3件の届出がありました。1月からの報告数は13件となり、昨年よりは減少していますが、2007年より市内では増加傾向にあります(表参照)。レジオネラは、市中肺炎の起因菌として重要ですが、過去に、ジャグジーや入浴施設、冷却塔等での集団感染も報告されています。診断された際には、浴槽の種類や温泉、銭湯等の利用状況等を確認する事も必要であると思われます。

レジオネラ症の報告数の推移(2001年～2009年37週) 2009年は37週まで

年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
全国	86	167	147	160	281	518	668	886	491
横浜市	0	3	2	1	8	7	28	32	13

全国のレジオネラ症の報告の傾向は <http://idsc.nih.gov/jp/iasr/29/346/tpc346-j.html> をご覧ください。

< 麻しん >

2件の届出がありました。引き続き、対象児に対して予防接種の勧奨をお願いいたします。

<急性脳炎>

1件の届出がありました。11歳男児に見られた、38度以上の発熱、痙攣、意識障害を伴った新型インフルエンザウイルスによるインフルエンザ脳症です。

なお、平成15年11月5日より、急性脳炎(ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く)は、定点把握対象疾患から全数把握対象疾患となっています。インフルエンザ脳症を診断した場合、全ての医療機関は急性脳炎としての届出をお願いします。

小児における新型インフルエンザの臨床像は、感染症情報センターの情報をご覧ください。

http://idsc.nih.go.jp/disease/swine_influenza/2009idsc/children0915.html

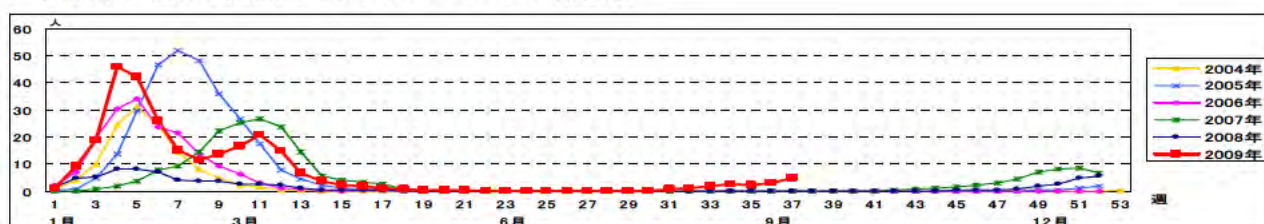
定点把握の対象

<インフルエンザ>

第32週から定点あたりの報告数1を超えていましたが、その後漸増し、第37週には、定点あたりの報告数が4.97となっています。第37週の迅速診断キットの報告では、Aが590件、Bが9、A、Bも陽性が3件となっています。年齢層では20歳未満に多く感染が見られます。行政区別では、都筑区が10.14と、注意報レベルを超えています。磯子区9.67、栄区7.20、港南区7.00と続きます。川崎市は3.57、神奈川県(横浜、川崎を除く、以下県域)では、3.04、全国では3.21といずれも横浜より低い値です。

8月10日から9月7日までの病原体定点からのインフルエンザウイルス分離・検出状況では、検出された29件すべてAH1pdmでした。

横浜市における定点あたりのインフルエンザ報告数



年齢層別 5 週集計

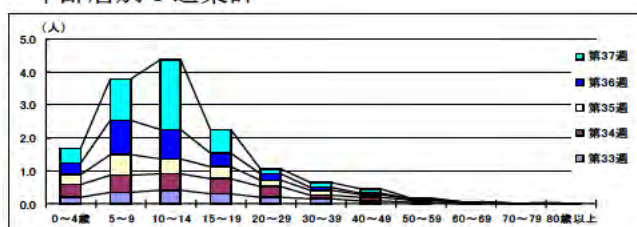
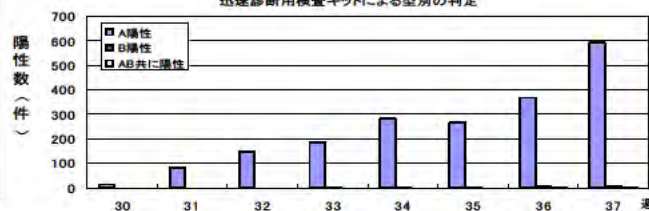


図3 横浜市内の患者定点医療機関における迅速診断用検査キットによる型別の判定



<手足口病>

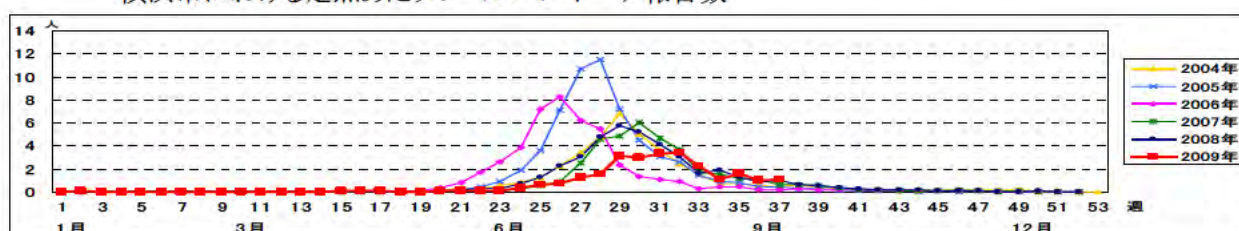
第30週に定点あたり3.00とピークを迎えましたが、第37週には定点あたり0.73と減少しています。

川崎市は0.65、神奈川県県域は0.40、全国は0.89でした。

<ヘルパンギーナ>

第37週では定点あたり1.06と減少しましたが、行政区別では、緑区が5.75と、引き続き高い値です。続く泉区は2.75、磯子区は2.25です。川崎市では0.91、神奈川県県域では1.05、全国では1.04でした。

横浜市における定点あたりのヘルパンギーナ報告数



< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

8月は、性器クラミジア感染症の報告数は男性22件、女性17件で、15歳から40歳代の年齢分布でしたが、性器ヘルペス感染症は、男性9例、女性18例で、20歳から70歳以上と、幅広い年齢層に見られています。尖圭コンジローマは男性3例、女性3例、淋菌感染症は男性19例、女性2例でした。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ（内科）定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹（病院）定点：3か所、の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2009年9月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点40件（鼻咽頭ぬぐい液）でした。患者の臨床症状別内訳は、インフルエンザ（疑いを含む）28人、気道炎（上気道炎、下気道炎、急性咽頭炎、気管支炎等）11人、発疹症1人でした。

10月9日現在、インフルエンザ患者22人と気道炎患者2人から新型インフルエンザウイルス（AH1pdm）が分離されています。これ以外にPCR検査では、気道炎患者2人からコクサーキーウイルスA2型ウイルス、インフルエンザ疑いの患者1人からヒトメタニューモウイルスの遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

9月の感染性胃腸炎関係の大腸菌株の受付は2株で病原大腸菌は検出されませんでした。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は4件でA群溶血性レンサ球菌が3件から検出されました。

また、百日咳の検体は1件で百日咳菌は検出されませんでした。